

TITLE ON RIGHT OF PAGE

黒島の集落

平戸藩の牧場跡の再開発地に開拓移住することによって共同体を維持した集落

TEXT RUNNING ALONG PAGE TOP

「黒島にも 600 人の潜伏キリシタンがいます」

信徒発見からたった 2 ヶ月後の命懸けの告白

BODY TEXT

平戸藩の牧場跡への移住

黒島は佐世保の西方海上に浮かぶ周囲約 2 キロメートルの小島です。黒島の名称は 13 世紀頃の文献史料に初めて登場し、14 世紀頃には島の北部に本村集落が形成されていたことが分かっています。

17 世紀になると、黒島には平戸藩の馬を育てる牧場が設置されました。しかし、馬よりも田畑の必要性が増したことで、牧場は 19 世紀初頭に廃止されました。平戸藩は牧場跡の再開発のため、開拓民の誘致政策を進めました。外海地域などから黒島へと移住した開拓民は、19 世紀中頃までに新たに 7 つの集落を島内に形成しました。これら開拓民の中には多くの潜伏キリシタンが含まれており、新しく形成された 7 つの集落のうち、6 つ(日数・根谷・名切・田代・蕨・東堂平)が潜伏キリシタン集落でした。

潜伏キリシタンは、先住民と共存できる可能性が高いという理由から黒島を選んだと考えられています。目論見通り、彼らは黒島において移住と共同体の維持に成功しました。

既存社会・宗教との共生

黒島に移住した潜伏キリシタンたちは、本村集落の興禅寺に所属し、表向きは仏教徒として振る舞いました。

黒島では毎年、潜伏キリシタンは本村集落の庄屋屋敷で、絵踏(キリストや聖母マリアの像を踏むこと)を余儀なくされました。そのような中でも、彼らは興禅寺の本堂に、子抱観音を聖母マリア像に見立てた「マリア観音」をひそかに祀ることができていました。寺院に参拝することを装いつつ、実際はマリア観音に祈りをささげていました。

この島の墓地は、黒島の潜伏キリシタンが表向きは仏教徒を装いつつ、指導者を中心として組織的に自らの信仰を継続したことをよく表しています。墓地は、墓石の向きや埋葬の方法が仏式とは全く異なる独特様式をしています。